

● 授業記録

「五年生のうそへの挑戦と限界」

—— 白いぼうし（五年下光村図書出版）を材料として ——

飯住良夫

資料 I

白いぼうし（五年上光村図書出版）

「これは、レモンのおいですか。」

ほりばたで乗せたお客のしん士が、話しかけました。

「いいえ、夏みかんですよ。」

シグナルが赤なので、ブレーキをかけてから、運転手の松井さんは、にこにこして答えました。

「ほう、夏みかんののは、こんなににおうものですか。」

「もぎたてなんです。きのう、いなかのおふくろが、速達で送ってくれました。においまでわたしにとどけたかったでしょう。」

「ほう、ほう。」

「あまりうれしかったので、いちばん大きいのを、この車にのせてきたのですよ。」

青になると、たくさん車の車が一度に走りだしました。その大通りを曲がって、細いうら通りにはいった所で、しん士はおりていきました。

アクセルをふもうとしたとき、松井さんははっとしました。「おや、車道のあんなすぐそばに、小さいぼうしが落ちているぞ。風がもうひとふきすれば、車が、ひいてしまうわい。」

緑がゆれているやなぎの下に、かわいい白いぼうしが、ちょこんと置いてあります。松

井さんは、車から出ました。

つまみ上げたたん、ふわっと何かが飛び出しました。

「あれっ。」

もんしろちようです。あわててぼうしをふり回しました。そんな松井さんの目の前を、ちようはひらひら飛びながら高くまい上がると、なみ木の緑の向こうに見えなくなっていました。

「ちっ、わざわざここに置いたんだな。」
ぼうしのうらに、赤いししゅう糸で、小さくぬい取りがしてあります。「たけやまうちえん たけのたけお」

小さなぼうしをつかんで、ため息をついている松井さんの横を、太ったおまわりさんが、

じろじろ見ながら通り過ぎました。「せっかくのえものがいなくなっていたら、この子は、どんなにかがっかりするだろう。」

ちよっとの間、かたをすばめてつつ立っていた松井さんは、何を思いついたのか、急いで車にもどりました。

運転席から取り出したのは、あの夏みかんです。まるで、あたたかい日の光をそのままめ付けたような、みごとな色でした。すっぱい、いいにおいが、風であたりに広がりました。

松井さんは、その夏みかんに白いぼうしをかぶせると、飛ばないように、石でつばをおさえました。

車にもどると、おかっぱの小さいかわいい女の子が、いつの間にか、ちょこんと後ろのシートにすわっています。

「道に迷ったの。行っても行っても、四角い建物ばかりだもん。」

つかれたような声でした。

「ええと、どちらまで。」

「ええ、あの、あのね、菜の花横町ってあるかしら。」

「菜の花横町のことですね。」

エンジンのかけたとき、遠くから元氣そうな男の子の声が近づいてきました。

「あのぼうしの下さあ。おかあちゃん、ほんとうだよ。ほんとうのちようちよが、いたんだもん。」

水色の新しい虫取りあみをかかえた男の子が、エプロンを着けたままのおかあさんの手

を、ぐいぐい引っぱってきます。

「ぼうが、あのぼうしをあげるよ。だからおかあちゃんは、このあみでおさえてね。あれっ、石がのせてあらあ。」

客席の女の子が、後ろから乗り出して、せかせかと言いました。

「早く、おじちゃん。早く行ってちようだい。」

松井さんは、あわててアクセルをふみしました。やなぎのなみ木が見る見る後ろに流れていきます。

「おかあさんが、虫取りあみを構えて、あのちびちゃんかぼうしを、そうつとあげたとき。」と、ハンドルを回しながら、松井さんは思います。「ちびちゃんは、どんなに目をまるくしただろう。」

もたちの反応を見た。

以下、授業記録

第一作業
子どもたちは、物語を四段落にわけて、それぞれの段落を読んだ、第一感想として、場面を絵に書く。

この作業の結果、図Ⅰのように、六組のものを抽出し、子どもたちに見せた。この際※印のものは、一人の子どもが書いた四場面の絵である。この子の絵が、第一作業の絵としては、特異な存在であり、こちらの目標にこの段階において、近いものであったので、意図的に六組のグループに入れ、子ど

すると、ぽかっと、口を^オの字にあけている男の子の顔が見えます。「おどろいただろうな。まほうのみかんと思うかな。なにしろ、ちようが化けたんだから。」

「ふふふっ。」

ひとりどにわらってしまいました。と、次に、

「おや。」

松井さんはあわてました。バックミラーには、だれもうつっていません。ふり返っても、だれもいません。

「おかしいな。」

松井さんは車を止めて、考え考え、まどの外を見ました。

そこは、小さな団地の前の小さな野原でした。白いちようが、二十も三十も、いえ、もっ

と、

とたくさん飛んでいました。クローバーが青々と広がり、綿毛と黄色の花の混ざったたんぽぽが、点々のもようになつてきいています。その上を、おどるように飛んでいるちようがばんやり見えているうち、松井さんには、こんな声が、聞こえてきました。

「よかつたね。」

「よかつたよ。」

「よかつたね。」

「よかつたよ。」

それは、シャボン玉のはじけるような、小さな小さな声でした。

車の中には、まだかすかに、夏みかんのにおいが残っています。

(あまん きみこ)

I 信号が赤なので、しゃべっているところがよくでている。

Ch I だが、いいかなあー。

(騒然)

I 約五分経過

T この三番目のはどうだ。V

Ch おかしいよ。

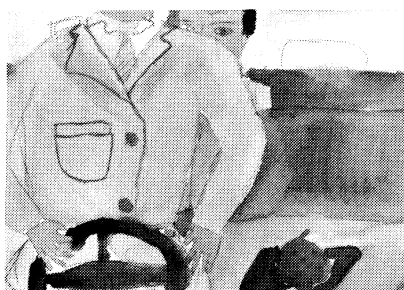
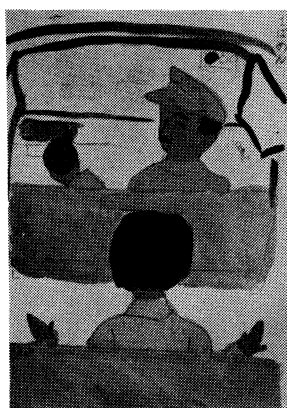
Ch へんだよ。

Ch かわつてーう。

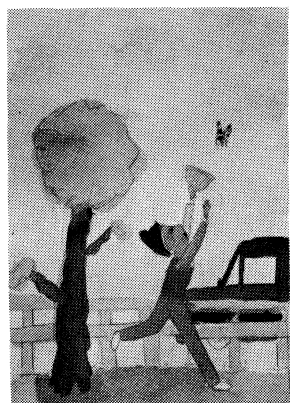
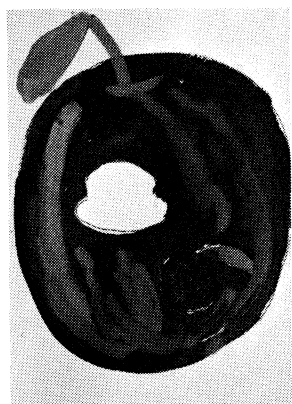
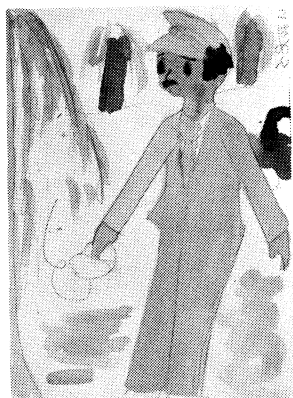
(騒然)

(このあと三番目の絵※印のものには話し合いの時に、一顧だにもしなかった。)

第一段落



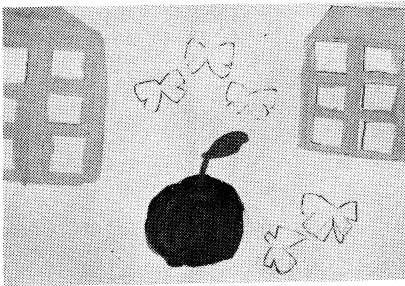
第二段落



第三段落



第四段落



注

- ・段落わけは本文に従った。
- ・右の例は第二段目の子どもの絵以外、特別に意図して摘出したものではない。

資料Ⅲ

第二作業（話し合いの最終時間）

△白いぼうしは、どうして、いらなの。
の。▽

田中 白いぼうしは、中にいたちよう

が、外に出て、それから、話が
続いているわけで、その白いぼ
うしというのは、まんなかへん
に少し出てくる。主役は、松井
さんとか、ちょうであって、白
いぼうしは、かげの役目なので
絵にする時は、いらぬ。

出川

白いぼうしは、必要だよ。白い
ぼうしが落ちていて、それを松
井さんが見つけて、あけてみた
ら、そこから、ちょうがとびだ
したことから、この物語は始ま
っているのだから、必要だよ。

清水 私もし、白いぼうしがなければ、物
語は、続かないと思います。

窪田 もし、白いぼうしが、落ちてい
なかつたら、どうなるの？

△絵にする時は、色は、かまわぬい
か。▽

清水 白いぼうしでなければ、目に
つかぬいと思います。白いぼうし
だから、目についたんだと思
います。

田中 黒はだめ。白か黄色。目立つ
色でなく。

Ch 黒だつていいじゃん。

Ch （騒然）

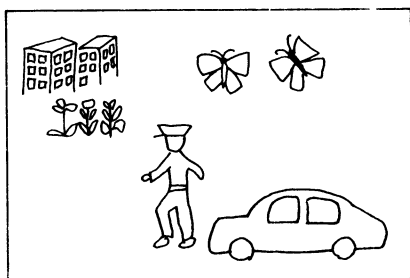
△田中は、そうすると、白いぼうしが
いるわけだろ。▽

田中 絵にする時は、いらぬと思う。
金子 どうしてさ。白いぼうしが
ない

と、題がつかないで、松井さん
とか夏みかんとかいう題にな
つてしまふ。

△田中が考えている絵は、どんな絵な
んだ。ちよつと黒板に画いてみるよ▽
Ch そうだ。そうだ。画いてもら
うよ。

（田中、黒板に、絵を画く）



Ch あつはつはー。

△なかなか、うまいな。こんなふうな
絵になるだろうということだね。▽

△この中で、いらぬものは、ないか
ね。▽

Ch シグナル。
やなぎ。

Ch （ここで、子どもたちは、前時での結
果を答え始めてしまつた。

前時までは、子どもの視点は、写
実的なとらえで、必要・不必要をと
らえるということにあつた。その姿
勢が、残つてしまつてゐる。）

田中 夏みかん。ーぼうしの中に
くれてゐたから。

△夏みかんは、かくれたままなの。▽
Ch 最後に出てくる。

△じゃ、いろの。▽

Ch ……

石井 おかあさんと男の子がいらぬ。
ちよつとだけしかでてこない。

田中 ちようちよ。

Ch 全 （笑）いろよ。いろよ。

金子 しん士は、いらぬ。それから
しん士がいらぬのだから、し
ん士が行つてしまつた裏通りも
いらぬ。

△ぜひ、必要なものは？▽

Ch 松井さん。

Ch 車。松井さんの車の中から、話
がはじまつてゐる。

△夏みかんは、いらぬのかなあ。▽

Ch ーいろのかなあ。いらぬ
かな。

Ch 野原は、いろ。そこにちようち
よがいたから。

Ch だつたら、団地もいろよ。小
さな団地の前の小さな野原とある
から。

田中 車はいらぬと思う。しん士も
いらぬかつたんだし。

△車はいらぬ。じゃ、いらぬもの
は。▽

窪田 虫とりあみ。
Ch エプロンもいらぬ。

Ch （笑）

金子 おかあさんと子どもがいらぬ
んだから、当然でしょ。

△松井さんは、いろのかなあー。▽

Ch 松井さんは、いらぬあーい。

山崎 女の子とちようちよがつなが
つてゐるから、松井さんは、いら
ぬと思ひます。

佐々木 松井さんは、いろと思ひ。松井
さんがいなければ、話になら
ぬよ。

田中 だつて、車の中から見てるんだ
から、いらぬ。

出川 松井さんが考えたこと、思つた
ことがたくさん、この物語には
でてゐるから、松井さんは必要
だと思ひ。

田中 いらぬいよ。

△考えたこと、思つたことは、どう表
わしたらいの。▽

古谷（資料Ⅱの図Ⅰの※の絵Ⅱ本人
の絵Ⅱを指してわくをとつてか

くことを説明。)

△それで、みんないいかな。▽

Ch いい。

△そうすると、松井さんは、絵に必要なのかな。▽

田中 松井さんが思ったことだけを画けばいいから、松井さんは、いい。

それから、かこみもいらんんじゃないかな。

(ここで、いらぬものを、黒板の田中の絵から消していく。最後に、ちようちよだけが残った。団地については、子どもたちは、騒然となったが、いらぬものの方が多かったで消した。)

△松井さんが思ったこと、考えたことだけを画けばいいというけれど、松井さんが、思ったこと、考えたことというのは、どんなことなんだ。▽

木村 「よかったね。」 「よかったよ。」 というのは、考えたこと思ったことだ。

金子 「おどろいただらうなあー。なにしろ……云々」というのも思ったこと。

Ch (記録とれず)
Ch (記録とれず)
△佐々木、この前、この話は、なんだか、うそのようなことが多いと言っていたね。うそのようなことって、

どんなことなの。▽

佐々木 「なにしろ、ちようが化けたんだからな」というところや、この前の話し合いで、ちようが少女に化けたんだっていったけどそんなことあるわけないから。

田中 「よかったね。」 「よかったよ。」 というのも、うそだよ。

Ch (記録とれず)

Ch この話は、ぜんぶうそなのかなあー。

△ぜんぶ、うそなの？ ほんとのことはないの？▽

志摩 「夏みかんのおいが、かすかに残っています。」 というのは

ほんとのことだと思ふ。

梅田 一段落(「これは、レモンのにおいですか。」「しん士は、

おりてきました。までを一段落とした。)

古谷 「エンジンがかけたとき、遠くから、元気そうな男の子の音が近づいてきました。」 というところから、

「あれっ石がのせてあらあ。」 というところまでは

ほんとのことだと思ふ。

志摩 「クローバーが青々と広がり、綿毛と黄色の花の混ざったたんぼぼが、

点々のもようになって

さいています。」 というのは、ほんとのことだ。

古谷 「松井さんはあわてて」から、

「やなぎのなみ木が見る見る後に流れていきます。」 というところ。

出川 「よかったね。」 「よかったよ。」 というのは、ほんとのことだと思ふ。

田中 それは、松井さんの心の中の声だからうそだよ。

出川 ほんとだよ。心の中の声だからこそ、ほんとなんだよ。

飯田 心の中の声でも、ほんとに聞こえたんだから、ほんとだと思ふ。

佐々木 「よかったね。」 「よかったよ。」 というのは、心の中の声なんだから、ちようがしゃべったのか、はつきりしない。ちようがしゃべるはずがないし。だから、うそなんだ。だれも聞いたわけないから。

望月 別に、だれか他の人が聞いてなくても松井さんには聞こえたんだからほんとだと思ふ。

田中 望月さんの言う理屈だと、松井さんにとっては、うそがなくなっちゃうんじゃないか。

△この話のぜんぶが、松井さんにとっては、ほんとうではまずいのか。少女も、ほんとのことなんだね？▽

Ch (呆然自失)

志摩 少女は、松井さんにとっては、

ほんとだね。

△うそじゃないんだね？ ほんとなんだね？▽

(子どもたちの疑問の追い討ちのため

にいう)

志摩 ……………。

志摩 ……………。

△「夏みかんのおいが残っています」というところと、「よかったね。」

「よかったよ。」 というところと、少女のことは、同じほんとなんだね？▽ (子どもたちの疑問の追い討

相模原市橋本 6-26-5

文成堂書店

TEL (72) 1958

ちのためという)

窪田 「夏みかんが残っています。」

というところは、はっきりした
ほんとで、「よかったね。」

「よかったよ。」というところ
は、はっきりしない。松井さん

にとっては、心の中のことでは
んとだと思えます。

△心の中の話は、ほんとなんだね？

ほんとで、いいんだね？▽

田中 はっきりわかんないけど、なん

となく……はっきりしない。

△田中は、どうしても、うそがなきゃ

……▽

田中 なんとなくうそのようなかんじ

もするし……。

△松井さんのようなことを経験したこ

とがあるか。松井さんみたい。たと

えば、このクラスに、松井さんがい

るとして、五年一組で、白いぼうし

の学習をしています。そのうち、少

女がでてきて、いつのまにかいなく

なって、気がつくところには、ちょ

うちょがとんでいました。……みた

いなことを。▽

△みなが、今、考えているでしょう。

そのことは、ほんとなの？うそのな

山崎 心の中の声は、私は、うそとも

ほんととも言えない。なんか、

るようだ。

志摩 夢ならあるなあー。

△夢とうそとは、同じなの？▽

出川 夢と言ってもうそのこともある

し、ほんとのこともある。

志摩 そうだよな。

木村 この物語は、うそはないともい

えるし、ほんとでもない。

△だけど、物語はあるよ。▽

志摩 うそとほんとがまざって、「う

んと」だ。

Ch (笑)

△うそとほんととを、二つにわけちゃ

だめなのかな？▽

木村 この話が、松井さんの夢だとし

たら、そう書いてあるだろうし

……。

Ch 全 ……。

志摩 想像だ!! …… 想像じ

ゃないのかなあ。

△空想・想像というのは、この前やっ

たね。

今の自分から、はなれた、ずうつと

先のことを考えるのが空想だったね。

松井さんの場合は、どうだった。松

井さんの場合、今の自分と少女のこ

ととの間は、ものさしでは、はかれ

なかったね。松井さんが、車を運転

しているのと、少女を見たことは

同時におこっていたね。▽

Ch そうだったよな。

△松井さんの現実と非現実とは、どうな

っているんだろうね。▽

志摩 (記録とれず)とかしたのは現実。

田中 ぼくが、おしっこもらしたのは、

非現実……。

Ch (笑)

△非現実とは、遠くのことを考える空想

と考えていいのかな。▽

山崎 この世にありえないことを考え

るのが、うそでしょう。空想で

しょう。

志摩 あることもあるよ。たとえば

森に木こりがいたというのはあ

りえることだけど、ほんとに見

てないからうそだ。

△ほんとに見てないとうそのな？▽

古谷 空想とか、想像とかしていて、

それが実際におこる場合もある

から、それはうそとは言えない。

△それじゃ、今、考えている頭の中

ことはほんとなのか、うそのな

Ch わかんないなあー。(騒然)

古谷 あしたの仕事を想像していて、

あしたになってほんとにやれば

ほんとになるし、やらなければ

うそになる。

△松井さんは、同時におこっているん

だよ。▽

Ch ウーン 実際じゃないのかなあ

ー。

山崎 一時間前とか、一分前とか……。

町田市森野4-16-20

株式会社 天勝社

電話 (0427) 22-6127(代)

印刷のご用は当社へ

△松井さんは、一分前に、一分後のこ

とを、考えていたのかな？▽

Ch ○知らないうちに考えていた。

○ゆめみたいに考えている。

○いりみだれている。ーこういう

ことが白いぼうしの話なんだ。

○頭の中で、こんがらがっている

んだよ。

出川 うそっていうのはね、なんだか、

今いる世界と、ずうつと別の世

界のことのように思えます。だ

から、松井さんも運転している

ほんとの世界から、うその世界

ぼくたちとは、ずうつとはなれ

たところのことを考えていたん

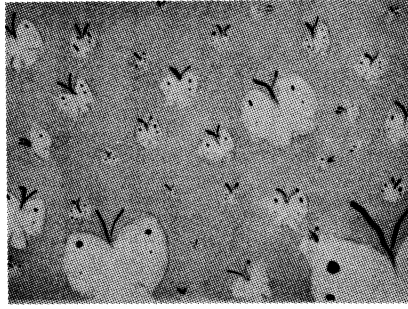
だと思えます。

資料Ⅳ

第三作業

話し合い後、子どもたちが、描いた絵を、その特徴を考え、分類してみると、次のような五つのものになる。
(描かせる前に、再度、通読させてみた。)

A タイプ



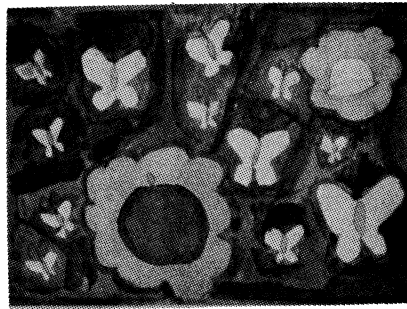
このタイプに入るものとして六名がある。

このタイプの特徴として考えられるのは、本文の物語中にでてる、いくつかの要素、つまり、物語の進展につれての各場面を構成しているもの(例えば、夏みかん、タクシー、松井さん、しん士、男の子、お母さん、シグナルなど)の中から、一つだけを選びだして、物語を最終的に表現しているもの

である。

以下のタイプの分類においても、この視点を、基準に分けてみた。

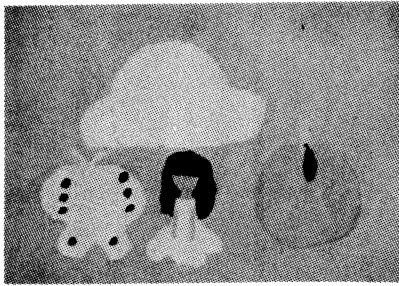
A₂ タイプ



要素が二つになっているものである。

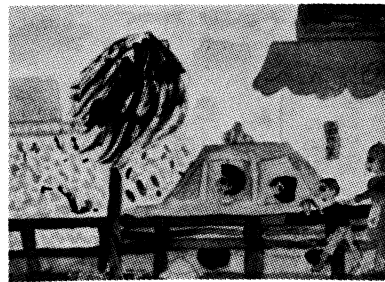
(二名)

B タイプ



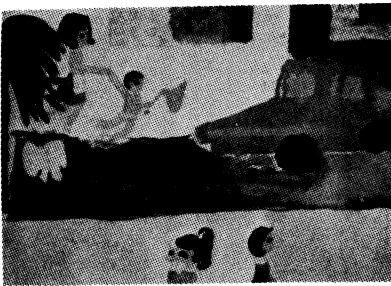
要素が三つ以上になっているものの上、物語上の一場面ではなく、全体を一場面としようとしているものである。(十三名)

C タイプ



B タイプと同様、要素が三つ以上になっているもので、しかも、場面が、物語の中の一場面を、バックとしているものである。(九名)

D タイプ



要素が不定であり、場面も、物語の一場面をバックにしているもの。(八名)

なお、こうして分類して見た結果、普段の描画の表現技術の高低による影響は認められないことを附記しておく。

― 授業を終えて ―

― 子どもたちの動きについて ―

子どもたちのなかで、最後まで、決できなかった問題は、

1, はたして、ちやうが、少女に化けたのか、少女がちやうに化けたのか。

2, 「よかったね。」「よかったよ」というのは、松井さんの心の中

株式会社 相模書房

小田急相模大野駅前
電話 東京町田(0427)42-3717番

の声なのか。それとも、ちょうがしゃべったのか。
という二点になる。

この二点について、どのような方向で、どのような視点に立ち、解決するかということが、子どもの、本教材に対する姿勢を、われわれに知らせてくれるものであろう。

1の問題については、早くから子どもたちに表われていた。その表われ方は、「不思議」「おかしい」「まほう」というような姿勢であった。これは、逆説的に考えれば、本教材の教科書が指定した学習目標「様子を想像しながら声を出して読もう」という「想像」ということが、「なぜ」「どうして」という姿勢で、子どもたちにとらえられていたといえるであろう。つまり、

資料Ⅱ第一第二段階の段階で、子どもたちが、※印の絵をきらったことについて考えてみると、この絵だけが、大へん、幻想的であり、場面の構成上、時間性においても、空間性においても物語からは、ほど遠く、「なぜ」というような逐一説明の姿勢とは、異っていたからであろう。この段階での、子どもの姿勢は、絵を描く時に、物語の文章をそのまま、構成していこうというところにあったと言える。

物語の各場面における時間と空間のそれぞれの設定を合理的にとらなければ

ばならないとしたのである。

ところが、第三段落、第四段落に入り、ほんとうのちょうが夏みかんに、少女が消え、ちょうが現われるということになると、「なぜ」という姿勢では、どうしようもなくなる。絵には、ならなくなるのである。ほとんどの絵が、ほんとうのちょうが夏みかんにあるいは少女が消え、ちょうが現われるという場面構成に苦慮している。苦慮していながらも、※印の絵には「おかしい」という。

この子どもたちの苦しみについて考えてみると、「はずがない」という、いわば、合理への志向がある反面、物語においては、「はずがない」ことが「ある」ようにもとれてしまうのである。

つまり、物語中の松井さんの幻想のような、幻想でないようなという、同時性におけるいわば白昼夢の如き意識の構えが、子どもの読みの姿勢においても、物語の松井さんと二重写しになつて表われていると言えよう。

これを解決するためには、「はずがない」ことを、どこにおいて（どういう読みの姿勢で）「はずがある」とこととするのかという、自分自身の構えの転換を迫られてきている。

しかし、新しい構えは知らない。と同時にこのようになってきた時、子ど

もたちの中に、「よかったね。」「よかったよ。」ということばが、松井さんにとって、本当であったのか、本当でなかったのかという問題が生まれてきている。

2の問題が、そうであるが、資料Ⅲの授業記録の様に、「心の中の声はうそ」という観点と「心の中の声はほんと」という観点の対立となるわけである。

ほんとうに、自分の目で見なければほんとでないという認識と、自分の目で見なくとも、心の中に聞こえたんだから、ほんとだという認識の対立と混乱である。

実は、対立でも混乱でもないのだけれども子どもたちにとっては、それをいづれか一方にしなければ「ほんとう」ということばが承知しないのである。

資料Ⅳにおいて言えば、物語を一つの場面の絵としておさめようとする構えのままであるから物語の中の種々雑多な要素は、どうしてもある特定時間内に構図しなければならぬ。

そのためにどの要素を、どれだけ選ぶかを問題とする。

Aタイプにおける子どもたちは、一つの要素で表現しきっている。あと問題となるのは、「にこい」の表現であるが、これは、画面としては、不可能であるのでやむをえないとする。

事務器とスポーツ用具

有限会社 **ボンネット**
小池 文治

相模原市橋本6-28-16
TEL <0427> 72-5441~2

がしかし、Aタイプの子どもたちが、夏みかんを持ち出したのは、物語中の「夏みかんのにこい」にひきづられているにちがいない。

BタイプからOタイプまでは、要素がふえると同時に、場所が明確になつてきている。このことは、子どもたちが、物語を読み、場面描写において、「思い」と「場所・物」とを、はっきり区別してとらえていると考えてよい。物によって構成された場面にまつわる「想い」とを、こちらの指示によって一画面に盛り込まざるを得ない混乱である。この混乱は、物語中の、「物」の出场所と「想い」の出场所との距離の差から見てみれば、その程度が如実にわかる。つまり、物語における時間

性を解消できなかったためのものではある。

Dタイプについては、物語の時間性にひきいられ、一場面におさめるための同時性への方向、基準を失ったものと見える。物語の中の「物」が、即、自分の「想い」であつたためか？

(追記)

白いぼうしを読んで

五年一組 TS 女

女の子は、どうしていなくなつたんだろう。走っている車から、松井さんに気づかれずにでられるだろうか。もしかしたら、女の子は、たけお君のつゝかまつた、白いちようかもしれない。もしそうだったら、松井さんのタクシーに乗って、小さな団地の前の野原にいる、仲間の所へもどつたのだろう。

でも、ちようが人間に化けるはずがない。ほんとうに、女の子は、どうやって車からでたか作者にきいてみたい。ぼうやが、白いぼうしをあけたら、夏みかんがある。ぼうやは、どんな気持だろう。おかあさんは、たけお君が、うそつきだと思ふかもしれない。それとも、喜んでみかんを食べちゃうかもしれない。私がおかあさんだったら、すぐにみかんを食べない。毒はないかなと調べてから、食べる。

松井さんは、やさしい人だと思う。

それはぼうしがふきとばされようとしているのを、拾ってあげたり、ちようをにがしたおわびにおかあさんの送ってくれたいじなみかんをあげたり、女の子を、車に乗せてあげたりしたからだ。私だったら、ぼうしが飛ばされようとするのぼうしだから、かんけいがない。ちようをにがしたつて、おわびなんかしない。女の子がお金を持っていたら、乗せてあげない。ただ乗りされたら、交番にうつたえる。と、こんなふうにするかもしれない。でも松井さんは、やさしく、おこらない。私も、松井さんのような人になりたい。人にやさしくて、悪いことをしたら、す直にあやまつて。

感想文

TS 女

この物語は、全部松井さんの空想だつたのだろうか。おかあさんの送ってくれた夏みかんも、お客のしん土も何もかも。私はそうは思わない。松井さんにとっては、みんな本当のことだつたのだと私は思う。女の子は、ちようだという人もいた。私もそうかなと思つたけれど、そんなことがあるはずはない。それでは女の子は、どうやって車から出たのか。それはわからない。では、団地の前で、松井さんに聞こえ

た声は、松井さんの車に、女の子に化けて乗つたちようが帰ってきたので、仲間が喜んでいて声なのだろうか。それも、わからない。本当にあつたことでも、こんなことはあるはずがない。これこそ、先生のおつしやつた現実の非現実ではないだろうか。本当にあつたことでも、そんなことはありえないこと。それこそ、現実の非現実であらう。作者（あまきみこ）も、現実の非現実を読者に言いたかつたんだと思う。

ほかに私は、ちようをにがしたおわびに、せつかくおかあさんの送つてくれた夏みかんをあげてしまつた松井さんのように、すぐにあやまれるす直な人になりたいと思つた。

白いぼうし

TS 女

この物語は、不思議な話だと思う。女の子がきえてしまつたり、団地の前の野原で

「よかつたね。」

「よかつたよ。」

「よかつたね。」

「よかつたよ。」

という声が聞こえたりして話がこんらんしている。これは松井さんの空想だつたという人もいる。全部、ゆめだという人もいる。空想やゆめでは、夏み

かんのにおいはしない。だから、この意見はおかしい。それではなぜ、こんなになつたか。深く追求してみた。すると、女の子はちようだという意見もでたのだが、ちようが人に化けるはずがない。女の子は、「うそ」だという人もいる。他に「うそ」と、「本当」の間、「本当」とバラバラに別れてしまつた。私は、女の子は松井さんにとつては、〃本当〃だと思ふ。ゆめや空想ではつたよくな声や、女の子のようすは、くわしくわからないはずだ。では、なぜ、どうやって、女の子は車からでたか。

「後ろのシートでねむつていた。」などという、とつびな意見もでた。しかしこれは、おかしい。ねむつていたら、松井さんがふり返つた時にみつけたはずだ。女の子はどうやって、車からでたかはわからない。でも私はそれでいいのだと思ふ。よくはいえないが、追求しても、本当のことはわからない。この話のうらがわは、あるてい度わかれば、深く知る必要はないと思ふ。

「現実の非現実」とは、女の子はなくなつてしまつたけれど、車から出られない。こういうことがあつたけれど、そんなことがあるはずがない。そんなことが「現実の非現実」だと思ふ。この話のうらが全部わかつてしまつたら、この話はいよいよおもしろい物ではない。わからないからこのようにおもしろい話ができただと思ふ。